

<一般部門>

- 『フィオーレ』 高柳 由美子
- 『expectation』 大矢 伸治
- 『さざなみ』 村瀬 五郎
- 『選る』 幅 若葉
- 『紙の糸』 早川 明宏
- 『美濃和紙藍染め紋り灯り』 皆藤 俊雄
- 『Reborn』 なかむらしげる
- 『流星群』 赤木 利正
- 『空性』 啓市
- 『名もなき花』 佐藤 貴久子

<小中学生・ファミリー部門>

- 『雨上がりのあじさい』 まきのファミリー
- 『千年生きた亀』 高橋 定寛 定瑛
- 『U・F・O』 90=
- 『みんなの愛』 中濃特別支援学校 中学部 3年生
- 『花よ咲け』 鈴木 陵馬
- 『開花』 合原 大智
- 『時を刻む明かり』 下斗米 絢弥香
- 『心の扉』 藤田 暲暉
- 『織』 名倉 奈央子
- 『Equinox』 渡邊 裕子
- 『森林』 安田 武博
- 『泡沫の群』 葵桃 金城学院大学
- 『MAGATAMA』 鈴木 米浩
- 『生命の樹』 倉橋 豊
- 『風音』 猿子 壮太(拓殖大学)
- 『重サニツイテ』 イソノ レイコウ
- 『涼灯』 松下 葵(名古屋芸術大学)
- 『醸成』 東谷 雄貴(名古屋芸術大学)
- 『清流』 吉田 日南
- 『木の子』 篠田 早苗
- 『海にいるかに』 山田 笑奈
- 『にじいろの魚たち』 野村 權
- 『しあわせふくろう』 辻 橙子
- 『和紙の水族館』 加藤 世羅・里莉
- 『針が立派なハリセンボン』 吉田 さくら
- 『海の人気者』 くらた あおい

審査員 <一般部門>

古川 秀昭 審査委員長・前岐阜県美術館館長
堀木 エリ子 和紙アートディレクター
高橋 理子 アーティスト・武蔵野美術大学教授
柴崎 幸次 愛知県立芸術大学教授

<小中学生ファミリー部門>

橋田 裕司 照明デザイナー
日比野 光希子 アーティスト
土屋 明之 岐阜県芸術文化会議会長

総評 一般部門 和紙はやはり美しい。今回も新しさが輝いていた。150点を越す「和紙」と「あかり」による作品群から27点が入賞した。大賞作品はまさに和紙そのものの提示なのだが、和紙の柔らかさだけの表現であるにもかかわらず、重厚な存在感を発揮している。受賞作にはそれぞれ和紙の特性、折る、切る、透かすを発揮して「あかり」によって想像を絶する美を生んでいる。そして和紙にまだまだ秘められた美しさが期待される。(古川)

小学生 子供たちの作品を見ていて、面白いと思うのは、個性がそのまま形になっていること。実は賞を選ぶ時、審査員の意見は分かれませんでした。それは、それぞれの作品がオンリーワンだからです。新設のファミリー賞でも、チームの個性がよく出ていました。選ばれた作品は、やはりそれに加え、光のバランスが良かったです。ぜひ今後の参考にしてください。(橋田)

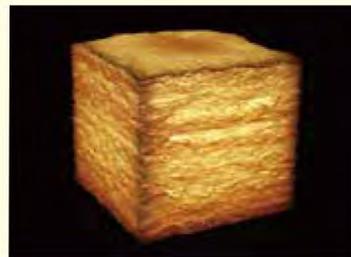
入賞された皆様、おめでとうございます。
今年も全国から多くのご応募をいただきました。

出展者、審査員、各協賛者、地域の皆様、ボランティアの方々、そして来場者の皆様——
支えてくださったすべての皆様に、心より感謝申し上げます。
美濃のまちを舞台に生まれた出会いや繋がりが、これからも広がっていくことを願い、
実行委員一同、次回またお会いできる日を楽しみにしております。

美濃和紙あかりアート展

入賞作品

👑 美濃和紙あかりアート大賞



作品 No.43 『切り出されたモノ』
安井 小百合

ほぼ正方形に切り取られた和紙が無類に重ねられている。柔らかい和紙の独特のシワが重ねられた立体の内側から発せられる光を絶妙に発散する。他の出展作と異なって切ったり、折ったり、曲げたりといった紙の性質を使わずに紙そのものの姿がたくましくある。(古川)

👑 中学生部門大賞

作品 No.509
『花火』 加藤 亜衣琉



薄い和紙を貼り付けた四角い箱の表面に、花火の模様を貼り付け、そこに中から漏れた光が映し出されるといふ幻想的な作品です。タイトルが「花火」ということで、表面に貼ってある花火の模様を、もっと華やかな色にする方法もあったと思うのですが、全体をモノトーンに仕上げていてある種の静けさを感じさせるのはかえって新鮮でした。(橋田)

👑 小学生部門大賞

作品 No.654
『みんなの森あかり』 モリノスの子どもたち



木々の葉が色づき始めた頃、騒がしい鳥の声を聞きながら森の中を友人たちとワイワイと散策をする情景が想像される。作品に目を凝らして見ればいろいろな動物を発見できる楽しさがある。様々な色を塗った和紙の断片を貼り合わせることで多種多様な生物が集まり共生の中で成り立つ森が一つの生き物として動き出すとしている生命感にあふれる作品である。(土屋)

👑 ファミリー部門大賞

作品 No.401 『きたむら家の休日』 ゆうきくんち



温かくやわらかいあかりと共に、おいそな食卓のビールとラーメンが届きました。お箸はきちんと箸置きに。レンジも添えられています。グラス越しのビールの彩も良く、丼に入ったラーメンは様々な具材のありようまで教えてくれて熱々のおいしさが伝わってきます。食卓を囲む家族の楽しい声が響いてくるような作品でした。(日比野)

👑 美濃和紙あかりアート賞



作品 No.73
『slow time』
伊藤 留美子

植物の種子のような造形だろうか。割れ目から見える球状の異なる質感の造形との構成が美しい。外側は、和紙の重ね貼りや、喰い裂き、落水紙を柔らかく解きほぐし独特の風合いを重ね合わせて見事にまとめている。(柴崎)



作品 No.94
『揺蕩い』
漆原 悠介
(拓殖大学)

ふくよかに空気を内包して、美濃和紙の柔らかさと温かさを自然な造形で表現している。作品の内部に血が通った生き物が居るようにも見え、和紙特有の空気感や気配を感じさせてくれる作品。皺の強弱が抑揚となり、力強くも感じられ、不思議な雰囲気醸し出している。(堀木)

👑 ライトアップ賞



＜古川秀昭賞＞
作品 No.5
『ブラックホール』
小川 克憲
(オガワアトリエ)

誰も知ることない「ブラックホール」とは、このようなものなのかもしれない。和紙の性質をたっぷり活かし、宇宙の源に迫る姿勢が好ましい。ただ、もしかすると支持体となる正方形のボックスには、もう工夫あるといいと思う。次回を期待する。



＜高橋理子賞＞
作品 No.79
『ほむら』
加納 英香

美濃和紙のしなやかさが存分に活かされた作品である。和紙をねじり上げた自然な動きが、タイトルの通り、燃え上がるような熱を感じさせ、作者の作品制作に対する情熱そのものであるように感じられた。中に螺旋状の支持体があるが、それが単なる形状保持に留まらず、美しい陰影を作り出し、作品全体に躍動感を与えている。



＜堀木エリ子賞＞
作品 No.8
『美濃和紙の花』
安田 武博

古くから続く、美濃和紙の里でのお祭りや花神輿を感じさせ、楽しさと華やかさがあり、和紙の里だからこそ生まれる作品。1本1本のパーツが丁寧に作られていて、和紙に対する愛情が感じられる。こよりの特性をいかした自然な「しなり」と小さな紙片が中央の照明に照らされて、生き活きと躍動して見える。



＜柴崎幸次賞＞
作品 No.60
『古紙楮』
渡辺 末明

古い書に使われた楮紙による作品。簀の目は細かいものあり、美濃でかつて渡かれた楮紙だろうか。簀の目の重なりを見るのも楽しい。近代以前、書の紙はほとんどが和紙であり、このような日本各地にある和紙の古紙も大切にしたいし、現代の生活へ新たな活用として注目したい。

👑 小中学生・ファミリー部門賞



＜橋田裕司賞＞
作品 No.620
『春に咲く美濃の桜』
鈴木 愛加

見ているだけで心が晴れやかになる作品です。お花だけでなく、木の幹の部分も丁寧に作られていて、全体のバランスがとても良いと思います。多分光源はLEDの白い光のタイプを使っていると思うのですが、この色味はピンク色との相性が良いので、それも爽やかさの表現につながっていると思います。



＜日比野光希子賞＞
作品 No.617
『えびでたいを釣る』
各務 李咲

青い水面から飛び跳ねている大きな赤い魚!なんとその口には一匹のエビが!「えびでたいを釣る」という言葉から抱いたと思われる景色が、見事に表現されています。真っ赤なひかりを体中にたくわえているたいは、釣られてしまったというより、食べちゃうよ!という元気な力強さがあって、がんばれーと応援したくなるようです。



＜土屋明之賞＞
作品 No.527
『光』
松井 琥汰朗

闇に浮かぶ荒々しい光の塊はオブジェとしての存在感を強く感じた。点から線へ、そして面と面とが繋がって立体となる造形の関係性を一生懸命に分かろうとする素直な姿勢がみられる。さらに、この作品を長い時間をかけて鉱物が結晶するその過程として捉えれば、今後作者がこれから出会う物や事に好奇心をもって造形の楽しさをより味わっていかれることを期待する。



作品審査2025年10月11日